



京都大学 KOKORO RESEARCH CENTER • KYOTO UNIVERSITY

こころの未来研究センター

# 研究報告会

こころを知り、未来を考える

2010年2月20日（土）、21日（日）

芝蘭会館 稲盛ホール、山内ホール

## プログラム

2010年2月20日(土) 13:00~18:00

13:00 ご挨拶 吉川左紀子(こころの未来研究センター長)

13:10 ご挨拶 吉川潔(京都大学理事 副学長)

13:20~13:40 長尾真(国立国会図書館長 元京都大学総長)

### 『こころの研究への期待』

13:40~14:10 基調報告1:「こころとからだ」領域

船橋新太郎(こころの未来研究センター 教授・神経生理学、神経科学)

### 『脳の働きを通して、人のこころをひもとく

—「こころとからだ」領域のめざすこと—』

14:10~14:40 指定討論

入来篤史(理化学研究所脳科学総合研究センター チームリーダー・神経生理学)

長谷川寿一(東京大学大学院総合文化研究科 教授・進化心理学)

14:40~15:00 休憩

15:00~15:30 基調報告2:「こころときずな」領域

吉川左紀子(こころの未来研究センター 教授・認知心理学)

### 『こころとこころはつながるか

—「こころときずな」領域の探求と実践—』

15:30~16:00 指定討論

乾敏郎(京都大学大学院情報学研究科 教授・認知神経科学)

山極寿一(京都大学大学院理学研究科 教授・進化人類学)

16:00~16:10 休憩

16:10~17:00 連携研究プロジェクト紹介

こころの未来研究センター 助教、研究員

17:00~18:00 連携研究プロジェクトポスターセッション (山内ホール)

2010年2月21日(日) 10:00~16:10

- 10:00 ~ 10:30 基調報告3 : 「こころと生き方」領域  
鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)  
『こころの練り方 — モノ・ワザ・身体・場所を通して』
- 10:30 ~ 11:00 指定討論  
福山秀直 (京都大学大学院医学研究科 教授・脳機能画像学)  
島藺進 (東京大学人文社会系研究科 教授・宗教学)
- 11:00 ~ 11:30 基調報告4 : 「こころと生き方」領域  
カール・ベッカー (こころの未来研究センター教授・倫理学)  
『生きがい感と心身のケア』
- 11:30 ~ 12:00 指定討論  
島藺進 (東京大学大学院人文社会系研究科 教授・宗教学)  
渡邊克巳 (東京大学先端科学技術研究センター 准教授・認知科学)
- 12:00 ~ 13:30 昼食休憩
- 13:30 ~ 14:00 基調報告5 : 「こころと生き方」領域  
河合俊雄 (こころの未来研究センター 教授・臨床心理学)  
『近代意識の過去と未来とその周辺』
- 14:00 ~ 14:30 指定討論  
北山忍 (ミシガン大学心理学部 教授・文化心理学)  
野間俊一 (京都大学大学院医学研究科 講師・精神医学)
- 14:30 ~ 14:50 休憩
- 14:50 パネルディスカッション  
入来篤史 (理化学研究所脳科学総合研究センター チームリーダー・神経生理学)  
北山忍 (ミシガン大学心理学部 教授・文化心理学)  
野間俊一 (京都大学大学院医学研究科 講師・精神医学)  
カール・ベッカー (こころの未来研究センター 教授・倫理学)  
進行 : 吉川左紀子 (こころの未来研究センター長・認知心理学)
- 15:50 ~ 16:10 尾池和夫 (国際高等研究所所長 前京都大学総長)  
『こころの未来への思い』

# 基調報告概要

基調報告1：「こころとからだ」領域

## 脳の働きを通して、人のこころをひもとく —「こころとからだ」領域のめざすこと—

船橋新太郎（こころの未来研究センター教授）

「こころ」の意味を『広辞苑』で調べると、「人間の精神作用のもとになるもの。また、その作用」と説明され、さらに具体的に「知識・感情・意志の総体。思慮・おもわく。気持ち・心持。思いやり・情け。情趣を解する感性。望み・こころざし」などの意味が付け加えられている。具体的な意味として列挙されている様々な人間の精神作用が、脳の働きと密接に関わっていることは疑問の余地がない。しかし、脳がかかわる様々な機能のうち「こころ」という言葉で表現されるものは、人の性格、思慮・分別のある状態、気持ちや感情、あるいは、他人に対する気兼ね、遠慮、気配り、思いやりなどであり、基盤的な機能である感覚や知覚、運動、記憶、言語などの働きを統合した、より高次の複合的な働きである。

一方、日本人は周囲にある様々なものの中に「こころ」を見出す。生えている木々や植物に、山々に、あるいは自然や宇宙に「こころ」を見出す。「こころ」という言葉には、「ものの中心」の意味もあることが示されている。「こころ」とは、「ものの中心」の意味をもつと同時に、中心にあるその本質、その根本となるもの、それがもつ最も重要な要素や概念やエッセンスの意味をも持っている。「自然のこころ」と言う場合の「こころ」は、自然の中に見出される中心的なエッセンス、自然の中に存在する根本としての何か、自然を特徴づける最重要なもの、を指していると思われる。同様に、「人のこころ」という場合の「こころ」も、人の性格であったり、行動パターンや能力であったり、感情表現であったりするが、同時に、その人を特徴づけるもの、その人の個性を生み出す根本となっているもの、中心となっているものを指しているように思われる。

このように、「こころ」は様々な意味で用いられる言葉であるが、自分自身のこころを認識し理解するのも、他人のこころを認識し理解するのも、そして、自然や宇宙のこころを感じるのも、われわれの脳の働きに拠っている。脳の局所的な損傷によってその人のこころが大きく変化することは、多数の臨床研究が明らかにしている。また、麻薬やアルコールなど、神経系の働きを変化させる薬物の摂取により、一時的に、あるいは慢性的に人のこころが大きく変化することもよく知られている。このような身近な事実は、人の「こころ」が脳によってコントロールされていることを明確に示している。したがって、「こころ」を理解するためには脳の働きの理解が不可欠であり、「こころ」という言葉で表現されている個性、気持ちや感情、他人に対する遠慮や気配りなどを、脳のどのような働きとして理解できるかを考察する必要がある。

## こころとこころはつながるか — 「こころときずな」領域の探求と実践 —

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

私たちは毎日、人に出会い、人の心について考え、理解や誤解を繰り返しながら生活している。そうした当たり前の「人と人の出会いとつながりのあり方」に焦点をあて、認知科学、脳科学、社会科学の手法を用いて、その背後の「こころの仕組み」を科学的に明らかにすることが、「こころときずな」領域の研究プロジェクトの目的である。

人が人の心をどのように理解し、つながりを形成し維持しているのか。そのあり方について科学的に研究することは、実は大変むずかしい課題である。当たり前のように見えることの中に、心の最大のなぞがあると言えるかもしれない。しかし、そうした探求を積み重ねることを通して、つながらない心についての理解を深めたり、切れてしまったきずなの回復に役立つ手がかりが得られるのである。私たちは、複数の研究手法を用いながら、人の心に備わっている、こうした「社会的知性」と呼べるものの本質は何かを明らかにすることをめざしている。講演では、(1) 表情や視線認知についての心理学・脳科学研究、(2) カウンセリングでの対話の映像分析研究などの具体例をあげながら、きずなを生み出すこころのはたらきについて、考察する。

きずなを形成する第1段階は、人を見ることから始まる。最近の心理学・脳科学研究から、人には表情から恐怖や怒りなどの負の感情を非常に敏感に察知する仕組みがあることや、笑顔と信頼感の生成の間に密接な関係があることなどが分かってきた。また、変化する表情を見ているときの脳機能画像の分析や、表情を見ている人の表情変化の解析から、相手の心の状態を自分の心に映す共感の仕組みの解明が進んでいる。そうした研究例についてお話しする。

もうひとつの話題は「対話」である。表情認識がきずな形成の第1段階だとすると、対話は比較的ゆっくりした時間の経過の中で、他者理解やきずなの深化が生じるプロセスである。「臨床対話の相互作用性」プロジェクトでは、熟練カウンセラーである臨床心理学者と認知科学者が共同してカウンセリング対話を題材にした実証研究を行っており、対話における「聞き手の役割」を科学的に解明しようとしている。

さらに、センターでは、社会のさまざまな場で、「こころときずな」に関わる探究や実践を行っている人たちと積極的に連携しながら、きずなの理解やきずなの回復について研究する試みも行ってきた。そうした試みについても紹介したい。

## こころの練り方 ― モノ・ワザ・身体・場所を通して

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

日本の伝統文化の中で「こころ」がどのように捉えられ、いかなる鍛えられ方（練られ方）をしたかを、日本の思想史の事例から探ることを通して、「こころと生き方」領域における問題のあり方を考えてみたい。

からだは目に見えるが、こころは目に見えない。その見えないこころを、「モノ」や「ワザ」や「身体」や「場所」を通して捉え、練ってきた歴史と文化がある。

たとえば、古語の「もの」は、物質としての「物」、人格としての「者」、霊性としての「霊」までの三層を内包している。それは、「もの」の中に、「もの」を通して、「こころ」や「たましい」を見て取り、「もののあはれ」を感受していた感性と思考である。そこには、物と心を截然と区分する物心二元論ではない、三層一体的な非二元論的思考がある。

そして、そうした「もの」観を通して、あるいは介して、「こころ」のありように変容をもたらす「わざ」をさまざまに開発・実践してきた。「わざ」とは、「こころ」と「もの」、また「こころ」と「からだ」を媒介し、つなぐもの・ことである。各種儀礼や宗教・武道・芸道などの修行もその一つである。

ここでは、「わざ」の一例として、空海が練り上げた「十住心」のこころ観に基づく三密加持の身体技法や、古代の神楽、中世の申楽（能）、近世の歌舞伎の特色とその舞台空間デザインのあり方からうかがえる「こころ」観の変遷について言及し、ワザ学研究会で進めてきた世阿弥の『風姿花伝』の読解の中から見えてきた、こころとからだの練り方の具体相を取り上げてみる。

「こころの練り方」とは、総じて、モノやワザや場所（例えば、聖地・霊場や寺社や滝場などの修行の場）を通して、こころとからだにある変容をもたらす技芸である。

そうした、「こころの練り方」の伝統を、日本神話、聖徳太子、最澄、空海、世阿弥、白隠、本居宣長、夏目漱石、宮沢賢治などの思想と表現の中から探りあて、それぞれの時代の特質や課題を示しながら、最後に、奈良県吉野郡天川村に鎮座する、神仏習合文化や修験道を深く体現してきた神社・天河大弁財天社の活動の中の「解器（ほどき）」制作を通して見えてきた「こころの練り方」の一事例を紹介してみたい。

## 生きがい感と心身のケア

カール・ベッカー（こころの未来研究センター教授）

現代人は、人類が今までに経験したことがない「生き方」をしていると言えよう。例えば、暗くなっても床に就かず電気を付けて深夜まで何かをすることは、何万年という人類史の中でわずか百年前から起こった新しい現象である。長時間通勤、座りっぱなしのデスクワークなどもそうで、常に秒刻みで時間を気にしながら仕事をしたり、携帯電話やパソコンで顔の見えない相手と無数のやりとりをしたりすることも、先人の想像をはるかに超える事態である。こうした新しい現象は人間の身体だけでなく、こころにも大きなストレスを与えている。

ストレスの原因は、科学技術の進歩による変化だけではなく、急変する社会のルールや規範への対応に迫られるという点にもある。近年、日本においても、「権利論」を盾に取った自己主張や過大要求が増え、医療現場ではいわゆる「モンスター患者」や「モンスター家族」という現象を生んでいる。そうした権利主張者への対応、日々の重労働など医療従事者のおかれている環境が深刻な状況であることは言うまでもない。環境改善の他に、彼ら/彼女らの心身のケアをいかに提供できるかが、今後の重要な課題となる。

近年、精神神経免疫学の多くの報告から、精神が健康に与える影響が明らかにされている。これを踏まえ、本センターにおけるプロジェクトでは、こころが生き方に及ぼす影響を明らかにするため、人生観や「生きがい感」を計る尺度、特にアントノフスキーの **Sense of Coherence** に着目している。アントノフスキーの **SOC** 尺度は、端的に言えばストレスコーピング力を測定するもので、把握可能感・処理可能感・有意味感の3つの下位尺度で構成されている。この尺度は、医療従事者や重篤な病を抱える者をはじめとして、人々の精神状態の把握と危機の早期発見、ひいては医療経費削減に役立つと考えられ、欧州では、数十万人単位の被験者に対して利用されている。それに対し、日本では **SOC** 尺度の認知度は依然低い。当センターのプロジェクトでは、2007年より、**SOC** 尺度でストレスの高い重篤な疾患（主にガン）患者の精神状態を測定し、治療経過との関係を調べている。調査結果からやはり患者の「生きがい感」と **QOL**（生活の質）が深く関連していることが証明された。また介護分野では、介護者のバーンアウトが大きな問題点となっているが、その要因、特にストレスコーピングに関しては十分に解明されて来なかった。そこで **SOC** 尺度などを用いて、特にストレスが高いとされる認知症患者の介護者のバーンアウトとその精神面の関係を調査している。この調査でも **SOC** は、バーンアウトと深く結びついていることが証明された。ガン患者と介護者という二本柱の研究をさらに発展させ、次年度からは、新人看護師の精神状態と深刻化する離職問題の関連性を探る計画である。いずれにおいても、病を患う人、医療関係者に対する心身のケアによって、「生きがい感」を高め、燃え尽きや離職を減らし、より良き医療に貢献できることを目指し続ける。

## 近代意識の過去と未来とその周辺

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

心理療法を行っていると、様々なこころや意識のあり方をした人に出会う。また現代の意識がどのような過去のあり方に基づいていたり、どのような方向に変化してきたりしているのかにも気づかされる。さらには、心理療法が近代において成立したように、それが近代意識に基づいているという自覚も大切である。

前近代のありかたが、自然、共同体に包まれていて、いわば物や相手側に主体があったのに対して、近代意識は、そこから分離して主体を確立させた結果、内面と自意識を持つようになった。このことは、対人恐怖を典型とする様々な心理的な症状を生み出すと同時に、自分のことに焦点を当て、自分の内面をふり返る心理療法の前提となっている。しかし過去における、物が魂を持つ感覚、自然とのつながりなどは、現代においても残っていて、われわれの生き方の大きな資源となっているのが、まさに心理療法において気づかされることがある。このような前近代のあり方を研究したのが、「京都における癒しの伝統とリソース」であり、「遠野物語の新しい<読み>」である。お寺や神社を訪れた話が、心理療法において意味を持ったことから、場所の持つ癒しの力を研究している。

また心理療法は、いわゆる神経症のような近代意識が生み出したのではない、いわばその周辺の症状にも直面している。心身症や発達障害においては、近代的な主体を前提にすることができず、そのために従来とは異なる心理療法的なアプローチが必要とされている。それに取り組んだのが、「甲状腺疾患における心と体の関係の研究」と「発達障害への心理療法的アプローチ」というプロジェクトである。特に発達障害に関しては、これまでの主体の存在を前提とした、クライアントに問いを返していく心理療法ではなくて、「ぶつかる」ことで主体の発生をめざす心理療法が探られつつある。

近年に対人恐怖が減少し、70年代から80年代に境界例、90年代に解離症状、その後発達障害が増加しているように、近代意識の特徴である葛藤や罪悪感が認められないあり方の人が増えているようである。

「現代における自己意識・他者意識の研究」というプロジェクトでは、近代意識は終焉し、内面や主体のないポストモダンの意識に向かっているのか、それともこれも主体を持つという近代意識の確立をめぐる一つの動きなのかを検討している。その中で、われわれの生き方を探っていければと考えている。



## 連携研究プロジェクト概要

研究プロジェクト タイトルと趣旨	研究代表者・連携研究員・共同研究員・ センター参画教員 (順不同)
<p><b>共感的対話の相互作用性</b></p> <p>心理臨床のカウンセリング対話に焦点をあて、臨床家と非臨床家、および熟練した臨床家と経験の浅い臨床家の対話の特徴を比較して、優れた聴き手、上手な聴き手のもつ特性を明らかにする。</p>	<p>吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授            桑原知子 京都大学大学院教育学研究科 教授            大山泰宏 京都大学大学院教育学研究科 准教授            渡部幹 早稲田大学高等研究所 准教授            小森政嗣 大阪電気通信大学情報工学科 准教授            長岡千賀 京都大学こころの未来研究センター            日本学術振興会 RPD</p>
<p><b>発達障害の認知・感情特性と療育的関わり</b></p> <p>本研究では①学習障害児や発達障害児の認知的特性を実験的に研究する基礎研究と、②研究のフィードバックを含めて実際の療育研究を行うという2つの指針を基に行っていく。</p>	<p>吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授            正高信男 京都大学霊長類研究所 教授            伊藤祐康 京都大学霊長類研究所 博士課程</p>
<p><b>&lt;モノ&gt;の表情・眼力の実証研究</b></p> <p>仏像等に代表される&lt;モノ&gt;に転写したものとしての表情・視線・姿勢の研究を、人間の表情・視線・姿勢認知の基礎的研究の立場から分析することによって、心理的・宗教的・文化的な絆となりうる &lt;モノ&gt;の特徴を探る。</p>	<p>渡邊克巳 東京大学先端科学技術研究センター 准教授            北村美穂 東京大学先端技術研究センター            協力研究員            有賀敦紀 イリノイ大学            日本学術振興会海外特別研究員 PD            吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授</p>
<p><b>日本におけるひきこもり・ニート： 社会心理学的アプローチと介入方法についての検討</b></p> <p>20代から40代までの「ひきこもり」「ニート」と呼ばれる傾向については、社会学や精神医学、臨床心理学などからのアプローチが行われてきた。本研究においては、社会心理学的視点により、日本文化とひきこもり・ニートの心理傾向との関連を分析し、介入方法の効果などを検討する。</p>	<p>内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター 助教            Norasakkunkit, Vinai ミネソタ州立大学心理学部            准教授/ 日本学術振興会外国人特別研究員</p>

研究プロジェクト タイトルと趣旨	研究代表者・連携研究員・共同研究員・センター参画教員（順不同）
<p><b>青年期の社会的適応と文化</b></p> <p>近年青年期における不適応感やコミュニケーションの不全が問題とされてきている。本研究では青年期およびその比較対象とする成人社会人における、対人関係・自己に対する認知および感情についての基礎研究を行う。特に、日米比較研究ならびに世代比較を行うことにより、現代日本の青年のかかえる問題を探る。</p>	<p>内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター 助教 北山忍 ミシガン大学心理学部 教授 Morling, Beth デラウェア大学心理学部 准教授 吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授</p>
<p><b>認知的文化差異の基盤に関する研究： 調整型・影響型対人関係の役割</b></p> <p>近年、社会・文化・認知心理学領域にまたがる研究において、基礎的な認知過程が文化間で異なることが明らかになってきた。しかし、そのような文化差がどのようなプロセスによって生起し、維持されているかというメカニズムについては十分な研究がなされていない。本研究では、認知の文化差を生み出す対人関係の在り方とその形成過程を実証的に探る。</p>	<p>宮本百合 ウィスコンシン大学心理学部 助教 内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター 助教</p>
<p><b>ソーシャル・ネットワークの機能と グループ内の「思いやり」の性質</b></p> <p>人と人とのつながりがうまく機能する場面はどういったものであるのか、相手の気持ちを慮る「思いやり」がポジティブに機能している集団はどのようなものなのかを探る。特に、農村ネットワークにおける普及指導員の役割に注目し、対人関係を「つなぐ」しくみについての調査を行う。</p>	<p>内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター 助教 吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授 竹村幸祐 ブリティッシュ・コロンビア大学心理学部 PD 今田俊恵 ミネソタ大学 研究員</p>
<p><b>日本人糖尿病患者における心理・社会的側面と 療養状況の関連</b></p> <p>日本人糖尿病患者の心理社会的側面、またそれらと療養の関連について、社会・文化心理学の視点を含めた尺度を用いて評価する。日本人糖尿病患者の価値観・思考様式、周囲から受ける支え、健康感、療育の状況を測定し、相互の関連について検討することにより、日本人に適した糖尿病指導を行い、患者の生活の質を維持することに関する基礎資料を得る。</p>	<p>藤本新平 京都大学大学院医学研究科 講師 池田香織 京都大学大学院医学研究科 博士課程 幣憲一郎 京都大学医学部附属病院疾患栄養治療部 永口美晴 京都大学医学部附属病院疾患栄養治療部 高原志保 京都大学大学院医学研究科 博士課程 内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター 助教</p>

研究プロジェクト タイトルと趣旨	研究代表者・連携研究員・共同研究員・センター参画教員（順不同）
<p><b>こころ学創生：教育プロジェクト</b></p> <p>本プロジェクトでは、さまざまな分野の最前線で研究を行っている研究者を招へいし、学内の学部生、大学院生に向けた講義やセミナーを開催する。若手研究者の育成、こころに関連する学問を伝えることなど、教育的成果が期待される。</p>	<p>吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授 内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター 助教</p>
<p><b>Web によるこころの研究ニュースの発信</b></p> <p>こころに関する研究を紹介する記事を Web 上に公開することを目的とする。そのことを通じて、科学的な「こころ」の研究の成果を、広く一般に還元することを目指す。「こころ」について、何が明らかとなっており、何が明らかでないのかということの正確な知識の普及は、人々が現在のありようを理解し、未来を考える上での基盤となることが期待される。</p>	<p>平石界 京都大学こころの未来研究センター 助教 田村亮 埼玉学園大学人間学部 専任講師 池田功毅 東京大学大学院総合文化研究科 博士課程</p>
<p><b>表情と視線の交互作用の認知神経メカニズム</b></p> <p>表情と視線の交互作用における認知神経メカニズムの探求を目的とする心理実験での検討によって、心理的現象を明らかにする。心理実験のパラダイムを活用して、神経活動記録によってその神経基盤を明らかにする。これら多重モダリティでの実験知見を収束させ、表情と視線という2つの情報を統合的に処理する心的メカニズムを明らかにする。</p>	<p>佐藤弥 京都大学霊長類研究所 准教授 吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授</p>
<p><b>利他主義の進化認知科学的基盤</b></p> <p>血縁関係にない他人どうしの「きずな」がもたらすこころのはたらきとして、人間の利他性がある。このような人間の高度な利他性は、どのような至近的要因によって支えられているのだろうか？</p>	<p>小田亮 名古屋工業大学大学院工学研究科 准教授 松本晶子 沖縄大学人文学部 教授 平石界 京都大学こころの未来研究センター 助教</p>

研究プロジェクト タイトルと趣旨	研究代表者・連携研究員・共同研究員・センター参画教員（順不同）
<p><b>「社会的こころ」の多様性の進化的・遺伝的基盤に関する研究—双生児法による</b></p> <p>ヒトは、進化の過程で、生存と繁殖のために必要な資源の適切な分配のために、さまざまな心理的・行動的な適応方略を創発・機能させている。本研究ではこうした「社会的こころ」の形成過程とその多様性の機能を支える進化的・遺伝的基盤について、進化心理学と行動遺伝学の理論に基づいて、双生児法を用いて実証的に明らかにする。</p>	<p>安藤寿康 慶應義塾大学文学部 教授  敷島千鶴 慶應義塾大学文学部 非常勤講師  平石界 京都大学こころの未来研究センター 助教</p>
<p><b>がん患者の SOC 調査</b></p> <p>がん患者は、病気だけでなく、その治療からも身体的、心理的、社会的変化というストレスを受ける。そうしたストレス状況への対応において、個々の患者のこころの在りようがいかなる影響力を持つか、首尾一貫感覚（Sense of Coherence）を測定することにより実証的に検討する。</p>	<p>カール・ベッカー 京都大学こころの未来研究センター 教授  赤澤千春 京都大学大学院医学研究科 准教授  原田美穂子 京都大学大学院医学研究科 非常勤講師  中嶋文子 京都大学医学部附属病院看護部 看護師長  高野満希子 京都大学医学部附属病院看護部 看護師長  五味美智子 仁泉会病院 内科医員  有田恵 京都大学こころの未来研究センター 特定研究員</p>
<p><b>要介護者の主介護者におけるバーンアウトとその関連要因</b></p> <p>高齢者が人口の2割を超える社会において、介護者のかかえる問題の把握は不可欠である。特に主介護者がバーンアウトする要因を明らかにすることを通じ、介護される側、介護される側のこころにとってより良い介護をもたらす支援の形を探る。</p>	<p>カール・ベッカー 京都大学こころの未来研究センター 教授  福山秀直 京都大学大学院医学研究科 教授  並木千尋 京都大学大学院医学研究科 助教  日吉（谷口）和子 京都大学大学院医学研究科 博士課程</p>
<p><b>能動的注意に関わる脳内神経メカニズムの解明</b></p> <p>人が周囲のできごとと関係なく、能動的に何かに注意を向け続けるときに、どのようなこころの働きや時間的变化が生じているのか、「こころの窓」とも評される目の動き（眼球運動）を手がかりに探る。これにより、こころの状態や動きを作り出す基礎的なメカニズムを考察する。</p>	<p>船橋新太郎 京都大学こころの未来研究センター 教授  福山秀直 京都大学大学院医学研究科 教授  澤本伸克 京都大学大学院医学研究科 助教  齋木潤 京都大学大学院人間・環境学研究科 教授  山本洋紀 京都大学大学院人間・環境学研究科 助教  小川正 京都大学大学院医学研究科 講師  田内真惟人 京都大学大学院人間・環境学研究科 博士課程  大林茂 放射線医学総合研究所 主任研究員  南本敬史 放射線医学総合研究所 主任研究員</p>

研究プロジェクト タイトルと趣旨	研究代表者・連携研究員・共同研究員・センター参画教員（順不同）
<p><b>依存症に関する総合的研究</b></p> <p>携帯電話依存、ゲーム依存、ギャンブル依存など、薬物依存とは異なる新たな依存症に対し、その生起メカニズムや治療・支援法の開発などの基礎的・臨床的研究と、防止と改善のための対策立案が急務である。特にゲームやギャンブルへの依存症の生物学的要因に注目し、「はまるころ」の仕組みにかんする基礎的研究を実施する。</p>	<p>船橋新太郎 京都大学こころの未来研究センター 教授  福山秀直 京都大学大学院医学研究科 教授  谷岡一郎 大阪商業大学 学長 教授  十一元三 京都大学大学院医学研究科 教授  勝見幸則 大阪商業大学アミューズメント産業研究所  主任研究員  竹林美佳 京都大学大学院人間・環境学研究科 博士課程</p>
<p><b>甲状腺疾患における心と体の関係の研究</b></p> <p>心身症の一つである甲状腺疾患について、患者のこころを統計的研究とカウンセリングを伴う事例研究の二つの側面から理解し、さらには心理療法と身体的治療の関連を探る。これにより、こころと体の関係が心身の不調に与える影響を探る。</p>	<p>河合俊雄 京都大学こころの未来研究センター 教授  野間俊一 京都大学大学院医学研究科 講師  深尾篤嗣 藍野学院短期大学第一看護学科 教授  田中美香 隈病院 臨床心理士  金山由美 京都文教大学人間学部 教授  桑原晴子 岡山大学大学院教育学研究科 講師  梅村高太郎 京都大学大学院教育学研究科 博士課程  畑中千紘 京都大学こころの未来研究センター  特定研究員  鍛冶まどか 京都大学大学院教育学研究科 博士課程  谷垣紀子 京都大学大学院教育学研究科 博士課程  長谷川千紘 京都大学大学院教育学研究科 博士課程</p>
<p><b>発達障害への心理療法的アプローチ</b></p> <p>発達障害については、近年において薬物療法と訓練教育が中心となっているが、心理療法的アプローチも成果をあげていると考えられる。事例検討会から、心理療法的アプローチのエッセンスを抽出することで、倫理的問題や個別性の限界を越えて、心理療法から見えてくる発達障害へのアプローチを検討し、専門家や一般にフィードバックする。</p>	<p>河合俊雄 京都大学こころの未来研究センター 教授  田中康裕 京都大学大学院教育学研究科 准教授  竹中菜苗 京都大学大学院教育学研究科 助教  十一元三 京都大学大学院医学研究科 教授  黒川嘉子 佛教大学教育学部 准教授  畑中千紘 京都大学こころの未来研究センター  特定研究員</p>
<p><b>現代における自己意識・他者意識の研究</b></p> <p>日本人のこころが、日本古来の自己意識・他者意識から、明治期以後の急速な近代意識の確立を経て、現代、いかなるものに変化しつつあるのか、心理療法の事例、文学・芸術作品の検討、さらには思想的なアプローチを含めて研究し、日本古来のこころが、未来にたいしていかなる可能性を開くのか検討する。</p>	<p>河合俊雄 京都大学こころの未来研究センター 教授  矢野智司 京都大学大学院教育学研究科 教授  西平直 京都大学大学院教育学研究科 教授  田中康裕 京都大学大学院教育学研究科 准教授  赤坂憲雄 東北芸術工科大学 教授  岩宮恵子 島根大学大学院教育学部 教授  猪股剛 群馬大学教育学部 准教授  三浦佑之 立正大学文学部 教授  畑中千紘 京都大学こころの未来研究センター  特定研究員</p>

研究プロジェクト タイトルと趣旨	研究代表者・連携研究員・共同研究員・センター参画教員（順不同）
<p><b>京都における癒しの伝統とリソース</b></p> <p>京都におけるお寺・神社・祭りなどは、多くの人がこころの安定や癒しを求める場や儀式となっている。認知科学、臨床心理学、宗教学などの多角的な視点から、それらが持つこころを癒す仕掛けを解明し、さらには時代を超えて使える「臨床の知」として紹介していく。</p>	<p>河合俊雄 京都大学こころの未来研究センター 教授  渡邊克巳 東京大学先端科学技術研究センター 准教授  駿地真由美 追手門学院大学心理学部 准教授  畑中千紘 京都大学こころの未来研究センター 特定研究員  吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授  鎌田東二 京都大学こころの未来研究センター 教授</p>
<p><b>描画法におけるイメージの自律性の研究</b></p> <p>芸術療法の一つである描画法は心理臨床実践の場で広く用いられている。この技法においては、描き手も意識的に統制できないイメージの自律的なふるまいが技法の治癒力の発揮に大きく寄与していると考えられている。本研究では、このイメージの自律性を研究するために調査場を設定し、風景構成法を用いて定量的なものも含めた多種類のデータを収集分析することでイメージの自律的な動きの様相を具体的に描写する。</p>	<p>佐々木玲仁 九州大学大学院人間環境学研究院 人間科学部門 准教授  小森政嗣 大阪電気通信大学情報通信工学部 准教授  河合俊雄 京都大学こころの未来研究センター 教授  長岡千賀 京都大学こころの未来研究センター 日本学術振興会 RPD</p>

研究プロジェクト タイトルと趣旨	研究代表者・連携研究員・共同研究員・センター参画教員（順不同）
<p><b>こころとモノをつなぐワザの研究</b></p> <p>「こころ」に迫る観点として「ワザ」に注目したい。「ワザ（技・業・術）」とは、人間が編み出し、伝承し、改変を加えてきたさまざまな技法である。その技法には、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かな種類がある。このようなワザに着目することにより、人間のこころと、人間が作り上げてきた物や道具や観念世界などとの相互関係を具体的に吟味できる。ワザはこころとモノとをつなぐ媒介者である。</p> <p>通常、物は目に見えるが、こころは目に見えない。だが、こころはさまざまなワザを通して、物の世界に形を与え、人間世界に広がりと深みをもたらした。古くは、わが国では神を呼び出し、交わり、生命力を高め強化する技法を「ワザヲギ」と呼んだ。ワザは諸種の儀礼・芸能・芸術・技術・学芸・ライフスタイルを含み、人間はこのワザの力によって豊かな文化を形成し、生の充実をはかろうとしてきた。</p> <p>「ワザ」は「こころ」と同様に、広がり多義性を持つ言葉である。柔道では「ワザアリ」という語がそのまま国際判定語になっているが、世界共通語としての「ワザ」の世界を探求し、「ワザ」の本質と意味、またそのヴァリエーション（諸相）を研究することによって、こころと生の豊かさと面白さや楽しさを捉え、それぞれの生活実践に生かし応用することができる。そしてそれが個性と自由を担保したこころ直しと世直しにつながってゆく。</p>	<p>鎌田東二 京都大学こころの未来研究センター 教授  梅原賢一郎 京都造形芸術大学芸術学部 教授  内田樹 神戸女学院大学文学部 教授  藤井秀雪 京都造形芸術大学  ものづくり総合研究センター主任研究員  大西宏志 京都造形芸術大学芸術学部 准教授  菅原和孝 京都大学大学院人間・環境学研究科 教授  上林壮一郎 京都造形芸術大学芸術学部 准教授  小林昌廣 情報科学芸術大学院大学  メディア表現研究科 教授  山本ひろ子 和光大学表現学部 教授  岡田美智男 豊橋技術科学大学大学院知識情報工学系 教授  井上ウィマラ 高野山大学文学部 准教授  やまだようこ 京都大学大学院教育学研究科 教授  松生歩 京都造形芸術大学芸術学部 教授  関本徹生 京都造形芸術大学芸術学部 教授  松井利夫 京都造形芸術大学芸術学部 教授  石井匠 國學院大學伝統文化リサーチセンター PD  須藤義人 沖縄大学子ども学科 専任講師  大重潤一郎 NPO 法人沖縄映像文化研究所 理事長  近藤高弘 造形美術家、アーティスト  佐久間庸和 北陸大学未来創造学部 客員教授  上田洋平 滋賀県立大学地域づくり調査研究センター 研究員  大石高典 京都大学こころの未来研究センター 特定研究員</p>
<p><b>こころと身体をつなぐメディアとしての味覚研究：食の「質」をふまえた食教育の検討</b></p> <p>食には栄養化学的な側面のほか、生理・生態学的な側面や心理・社会・文化的な側面があるが、日本ではまだ短い食育研究史の中で、これら食の質にかかわる点はほとんど検討されてこなかった。本研究では、人類進化論的観点から「ヒトの食」の位置づけを確認した上で、「味覚」に焦点を当て、「味わうこと」を学際的な視点から整理する。</p>	<p>金子佳代子 横浜国立大学教育人間科学部 教授  山極寿一 京都大学大学院理学研究科 教授  川村協平 山梨大学教育人間科学部 教授  Norasakkunkit, Vinai ミネソタ州立大学心理学部 准教授/ 日本学術振興会外国人特別研究員  山内太郎 北海道大学大学院保健科学研究院 准教授  荒牧麻子 女子栄養大学 非常勤講師  山中亜希子 篠山チルドレンミュージアム 事業主任  藤原辰史 京都大学人文科学研究所 助教  大石高典 京都大学こころの未来研究センター 特定研究員  清野（布施）未恵子  京都大学大学院人間・環境学研究科・研究員  鎌田東二 京都大学こころの未来研究センター 教授</p>

研究プロジェクト タイトルと趣旨	研究代表者・連携研究員・共同研究員・センター参画教員（順不同）
<p><b>映像実践を通じたこころの学際的研究—文化と医療誌における映像をおもな対象として—</b></p> <p>映像メディアが普及した現代に注目し、こころを写す映像を対象に、人類学、心理学、認知科学などによる学際的収集・整理・分析を通じて、こころとイメージに関する問題群を、通文化的に明らかにする。</p>	<p>宮坂敬造 慶応義塾大学文学部 教授</p> <p>石井美保 一橋大学大学院社会学研究科 准教授</p> <p>新井一寛 京都大学大学院 アジアアフリカ地域研究科 研究員</p> <p>大石高典 京都大学こころの未来研究センター 特定研究員</p> <p>吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授</p>
<p><b>負の感情研究～怨霊から嫉妬まで～</b></p> <p>これまで「負」とされてきた感情を「正」の感情との相補的な関係や、「正」の感情との可換性を手がかりに、同時代の諸社会における参与観察と様々な時代の文献解釈を往還しつつ分析し、野外研究、文献研究のみならず、実験研究、臨床研究も加え、アプローチしていく。</p>	<p>鎌田東二 京都大学こころの未来研究センター 教授</p> <p>奥井遼 京都大学大学院教育学研究科 博士課程</p> <p>和崎聖日 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 日本学術振興会 PD</p> <p>大石高典 京都大学こころの未来研究センター 特定研究員</p>
<p><b>こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究 (人類はこころをどのようにとらえてきたか?)</b></p> <p>人類が「こころ」をどのようにとらえてきたかを、宗教・哲学・芸術・思想などの側面からまず思想史的に考察し、それをベースに比較文化論的な考察を加えてゆく。その際、霊長類からのヒトへの進化の視点を念頭に置く。</p>	<p>鎌田東二 京都大学こころの未来研究センター 教授</p> <p>山極寿一 京都大学大学院理学研究科 教授</p> <p>松本直子 岡山大学文学部 准教授</p> <p>湯本貴和 総合地球環境学研究所研究部 教授</p> <p>矢野智司 京都大学大学院教育学研究科 教授</p> <p>棚次正和 京都府立医科大学大学院医学研究科 教授</p> <p>氣多雅子 京都大学大学院文学研究科 教授</p> <p>末木文美士 国際日本文化研究センター 教授</p> <p>黒住真 東京大学大学院総合文化研究科 教授</p> <p>西平直 京都大学大学院教育学研究科 教授</p> <p>上野誠 奈良大学文学部 教授</p> <p>高橋義人 平安女学院大学国際観光学部 教授</p> <p>入來篤史 理化学研究所脳科学総合研究センター チームリーダー</p> <p>加藤忠史 理化学研究所脳科学総合研究センター チームリーダー</p> <p>石井匠 國學院大學伝統文化リサーチセンター PD</p> <p>上本雄一郎 滋賀県立大学人間文化学部 非常勤講師</p> <p>魚川祐司 東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程</p> <p>大石高典 京都大学こころの未来研究センター 特定研究員</p> <p>吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター 教授</p> <p>河合俊雄 京都大学こころの未来研究センター 教授</p> <p>平石界 京都大学こころの未来研究センター 助教</p> <p>内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター 助教</p> <p>カール・ベッカー 京都大学こころの未来研究センター 教授</p> <p>河合俊雄 京都大学こころの未来研究センター 教授</p>



連携研究プロジェクト・ポスター一覧

No.	代表者	タイトル
1	渡邊克巳	<モノ>の表情・眼力の実証研究
2	吉川左紀子	共感的対話の相互作用性
3	吉川左紀子	発達障害の認知・感情特性と療育的関わり
4	内田由紀子	日本におけるひきこもり・ニート：社会心理学的アプローチと介入方法についての検討
5	内田由紀子	青年期の社会的適応と文化
6	宮本百合	認知的文化差異の基盤に関する研究：調整型・影響型対人関係の役割
7	内田由紀子	ソーシャル・ネットワークの機能とグループ内の「思いやり」の性質
8	藤本新平	日本人糖尿病患者における心理・社会的側面と療養状況の関連
9	吉川左紀子	こころ学創生：教育プロジェクト
10	佐藤 弥	表情と視線の交互作用の認知神経メカニズム
11	小田 亮	利他主義の進化認知科学的基盤 Web によるこころの研究ニュースの発信
12	安藤寿康	「社会的こころ」の多様性の進化的・遺伝的基盤に関する研究—双生児法による
13	平石 界	Web によるこころの研究ニュースの発信
14	カル・ベッカー	がん患者の SOC 調査
15	カル・ベッカー	要介護者の主介護者におけるバーンアウトとその関連要因
16	船橋新太郎	能動的注意に関わる脳内神経メカニズムの解明
17	船橋新太郎	依存症に関する総合的研究
18	河合俊雄	甲状腺疾患における心と体の関係の研究
19	河合俊雄	発達障害への心理療法的アプローチ
20	河合俊雄	現代における自己意識・他者意識の研究
21	河合俊雄	京都における癒しの伝統とリソース
22	佐々木玲仁	描画法におけるイメージの自律性の研究
23	鎌田東二	こころとモノをつなぐワザの研究
24	金子佳代子	こころと身体をつなぐメディアとしての味覚研究：食の「質」をふまえた食教育の検討
25	宮坂敬造	映像実践を通じたこころの学際的研究—文化と医療誌における映像をおもな対象として—
26	鎌田東二	負の感情研究～怨霊から嫉妬まで～
27	鎌田東二	こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究（人類はこころをどのようにとらえてきたか？）

# 連携研究プロジェクトポスター配置図

ポスター会場：芝蘭会館 2F 山内ホール

ポスターセッション：2010年2月20日（土）17:00～18:00

掲示可能時間：2月20日（土）12:30～21日（日）16:00

## 山内ホール内ポスター掲示場所

